



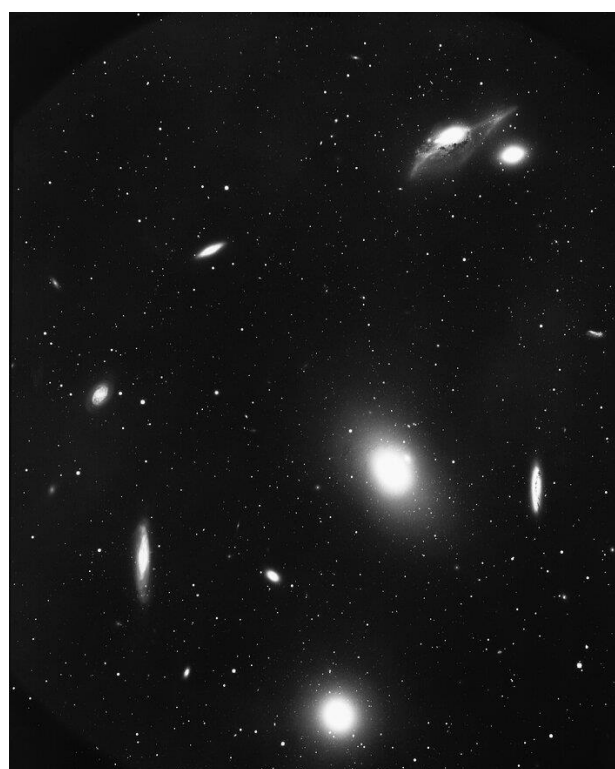
春の夜空は永遠^{えいえん}が見える

プラネタリウムでは「遠い天体の姿^{すがた}は、それだけ昔の姿です。」という話をするがあります。月は2秒、太陽は8分前の姿です。星座を作る星は数年から1000年も昔の光を見えています。天の川は数千年から数万年(5万年以下)くらい昔の姿^{にくがん}です。肉眼で見える一番昔の天体はアンドロメダ^{ぎんが}銀河で200万年前の姿です。

天体までの距離^{きょり}を「光年^{こうねん}」という単位^{たんい}を使うがあります。光が1年間に進む距離を1光年とし、「アンドロメダ銀河までの距離は200万光年」という使い方をします。そこには単に距離を現すだけではなく、それだけ昔の姿^{いみ}だという意味もこめられています。

昔の天体の姿、つまり遠くの姿を見るとき^{しょうがいぶつ}の障害物は実は天の川です。天の川は暗い星の集まりというだけではなく、光をほとんど通さないチリがたくさんあるのです。

春の夜空に天の川はありません。南の地平線の下を通っています。春を代表するおとめ座、しし座、うしかい座、かみのけ座など天の川から遠く離れた星座には、星の大集団である銀河がたくさん群れている姿(「銀河団^{かんそく}」といいます)が数多く観測されています。数千万年から数十億^{おく}年前の姿です。では、春の夜空は永遠に遠いところが見えるのかというと、実はそういうわけでもありません。そのお話はまた別の機会^{きかい}にいたしましょう。



おとめ座銀河団 1974年キットピークで撮影
われわれの銀河系もこの銀河団の一員です。
Credit: NOIRLab/NSF/AURA